

## [特別支援教育]

# 重度・重複障害児の興味の開発と自発的な行動を促すための工夫

— 感覚運動あそびを通して興味の対象を広げ、自らかかわろうとする意思の表出を高める試み —

田地野浩文\*

### 1 はじめに

重度・重複障害児の概念は、昭和50年3月に特殊教育の改善に関する調査研究会によって報告された「重度・重複障害児に対する学校教育の在り方」(辻村報告書)に示されている。ここでは、学校教育法施行令第22条の3に規定する障害を2以上併せ有する者のほかに、発達の側面から見て、「精神発達の遅れが著しく、ほとんど言語を持たず、自他の意思の交換及び環境への適応が著しく困難であって、日常生活において常時介護を必要とする程度」の者、行動的側面から見て、「破壊的行動、多動的傾向、異常な習慣、自傷行為、自閉性、その他問題行動が著しく、常時介護を必要とする程度」の者を加えて考えている。つまり、重度・重複障害児とは、盲・聾・知的障害・肢体不自由・病弱の障害が2以上重なっている重複障害児ばかりでなく、発達の側面や行動的側面から見て、障害の程度が極めて重い重度障害児も加えて考えており、重複障害児と重度障害児の両者を含む幅広い概念として捉えている。

なお、盲・聾・養護学校(特別支援学校)においては、養護学校教育義務制施行(1979年)以降、児童生徒の障害の重度化、重複化が進む中で、「重度・重複障害児」という用語が、様々な状態にある児童生徒を表す用語として用いられるようになってきている(西川 2000)。こうした重度・重複障害児に対して、公教育の場における指導法はどうあるべきなのかが現在も論議されている。重度・重複障害児は興味の対象が極端に少ないことも知られている。そこで、彼らの内面に存在する能力を刺激し、興味の対象を一つでも増やしていくことで、生徒が「学校が楽しい」「生まれてきて本当に良かった」と実感できるようになるためには、どのように教材を提示し、どのようなかわりをすればいいのかを考える必要がある(大沼 2002)。

つまり、重度・重複障害児への指導内容・方法の工夫や興味の開発が一層教師に求められているのである。

### 2 主題設定の理由

#### (1) 主題設定の背景、経緯

筆者は、一昨年、公立中学校の特別支援学級担任から現在の病弱養護学校へ赴任し、中学部重複障害学級の学級担任となった。在籍生徒は3名(男子2名・女子1名)で、いずれの生徒も病弱であり、普段は隣接する国立病院で医療的ケアを受けながら入院生活を送り、病院から当校へ通学している。3名とも、ほとんど言語を持たず、自他の意思の交換及び環境への適応が著しく困難であり、食事、衣服の着脱、排泄、車椅子への移乗等、日常生活において常時介助を必要とする。また、病弱、肢体不自由の他、知的障害を併せ有しており、前述の重度・重複障害児に該当するといえる。筆者は、中学校の特別支援学級においては、今まで主に教科書や自作プリントを使った教科指導を行ってきたのだが、病弱養護学校中学部の重複学級担任となり、発達年齢が概ね1歳前後の生徒に対しては、自分が今まで行ってきた教科指導の手法がまったく通用しないことを痛感させられた。しかし、幸いにも副任に養護学校勤務の経験が豊富なベテラン教師がつき、指導方法についてのアドバイスを受けることができ、その不安をすぐにぬぐい去ることができた。そのアドバイスとは、感覚運動指導を授業に積極的に取り入れていくというものであった。

#### (2) 重度・重複障害児の指導に効果的な感覚運動指導

感覚運動指導とは、発達障害児の指導で知的な学習の基礎となる感覚や運動の働きを重視し、様々な感覚刺激活動や運動活動を通して子どもの発達を促進していこうとする考え方である。感覚運動指導の一つの方法として、アメリカの作業療法士エアーズの感覚統合法がよく知られている。エアーズによれば、私たち人間は聴覚や視覚、触覚、重力を感じる前庭覚、そして筋肉や関節の動きを感じる固有覚などの感覚受容器を通して情報を取り入れているが、周囲の環境を適切に理解し、環境に適応していくためには様々な情報を脳で分類、整理、統合する必要があるという。

\* 新潟県立柏崎養護学校

体系化された自らの発達理論を基盤に、発達の障害は感覚が統合されていないために起こるとエアーズは捉えており、そのような子どもたちが環境からの情報をうまく統合し、環境に能動的にかかわり、適応できるようになるためには、前庭覚、固有覚、蝕覚などの感覚に刺激を与えることによって脳機能を活性化させ、各機能の発達により機能の協調や統合が図られ、その結果、行動の適正化が図られるという。発達の遅れている子どもたちは、身体内外の多様な感覚刺激を自分で統一する力の発達が遅れている。読み・書き・計算・ことばの指導以前に、ヒトの本来の動きや感覚運動の発達に注目してその指導内容を考える必要性を感じた。

(3) 感覚運動指導を行う上での配慮事項と興味の開発の必要性

坂本（1997）によれば、感覚運動指導をする上で次のような配慮や見解が必要だという。

- ①子どもが自分の力を精一杯使ってやれる遊びや活動を見つける。
- ②根気よく適切な準備をする。
- ③感覚統合的遊びは子どもに楽しいものでなくてはならない。
- ④子どもの気持ちをフィールドバックする。
- ⑤感覚統合的な指導が効果をおさめると、子どもは感覚からの情報を前よりもうまく迷わず処理できるようになる。
- ⑥感覚統合的指導を開始する前に、子どもがどのように変化していくかという見込みを立て行動変化を記録する。

筆者は、特に①、③、④の項目が感覚運動指導の内容を考える上で大切な視点と考える。感覚運動指導を行う際には、その内容が生徒にとって興味・関心のあるものでなければ指導の意味がないように思える。では、生徒はどのような活動に興味を示すのかを探る必要がある。興味を探る方法として、重度・重複障害児の興味の開発についての大沼直樹氏の著書を参考にしてみた。大沼

《興味の構造》

（2002）によれば、「興味と本能」は直結して、表裏一体であるという。大沼は「本能」を4つに限定し、それぞれを「原興味・本能・衝動・欲求」という言葉で表現し、さらに、子どもがもつ「原興味・本能」を、学校においては「探求したい」「生存したい」「表現したい」「コミュニケーションしたい」という4つの本能・潜在的興味（いわゆる「4つの原興味」）と分類する。そして、「原興味」が何らかの形で触発され、「つくられていく興味」（＝現興味）が開発されるという。（右図「興味の構造」）大沼は、この興味の構造化をもとに1歳前後の感覚運動期の発達段階にある子どもたち

興味	原興味	◎子どもの内面に潜在的にあるもの（本能・欲求・衝動） ①事物を探りたい（探求的原興味） ②食べたい、等々（生存的原興味） ③何かを表したい（表現的原興味） ④人とかかわりたい（コミュニケーション的原興味）
	現興味	◎つくられていく興味→現興味 <div style="display: flex; align-items: center;"> <div style="margin-right: 10px;">→</div> <div style="margin-right: 10px;">→</div> <div style="margin-right: 10px;">→</div> <div style="margin-right: 10px;">→</div> </div> 創造的興味 価値的興味 目的的興味 結果的興味 ①事物を探る（探求的現興味） ②食べる等々（生存的現興味） ③何かを表す（表現的現興味） ④人とかかわる（コミュニケーション的現興味）
	方法的興味	◎つくられてきた興味→方法的興味 <div style="display: flex; align-items: center;"> <div style="margin-right: 10px;">→</div> </div> 今在る興味 動機付け的興味 ☆引き付ける対象一般

に「感覚運動あそび」を中心とした教材を提示し、受容的に子どもにかかわることによって、重度・重複障害児の「興味の開発」はある程度可能ではないかという仮説を立て、著書の中で4人の子どもを対象に教育実践し、その成果を立証している。筆者も、大沼の教育実践的事例を参考にしながら、自学級の生徒を対象に、生徒の「原興味」に揺さぶりをかける様々な感覚運動あそびを取り入れることによって、生徒の興味の開発が図られないだろうか、興味をもって自らかかわろうとする行動を引き出せないものかと考えたのである。

3 対象生徒のプロフィール

(1) 病名等 病弱養護学校 中学部 生徒A （3年男子） 福山型筋ジストロフィー

生徒Aの教育課程については、生徒の実態から教科学習は難しいと考え、「日常生活の指導（週5h）」と「自立活動（週22h）」を主体として編成している。なお、「自立活動」には技能教科的要素を指導内容に含めている。

(2) 学級担任と最初に会った頃の様子

生徒Aは、隣接する国立病院で医療的なケアを受けながら入院生活を送り、本校へ通学している生徒である。個人カルテによると、医療機関で福山型筋ジストロフィーと診断されている。福山型筋ジストロフィーとは、筋肉が徐々に衰え力が弱くなっていく病気であり、知的障害を伴う点で通常の筋ジストロフィーと異なる。従って、筋肉の拘縮があり、手足の関節が硬くて十分に関節を曲げることができなかった。また、首の座りが悪いために姿勢保持や運動に制限があった。移動・移乗は全介助で、普段は手動車椅子を使用している。食事、排泄（オムツ使用）ともに全介

助の必要な生徒である。知的な遅れがあり、意思表示は時折見せる写真やカードへの指差し、視線や表情で表す他、「行くよ」「痛い」等の数語の発語と、気分のいい時に見られる鼻歌ぐらいである。4月当初は、学級担任とは初対面であり、レポートもなかなかとれない上、周りからの呼びかけに対して笑顔が少ない等、表情や反応に乏しい様子が伺えた。また、週末外泊以外は病棟での生活が主であり、生活上の制約もあって興味の対象が少なく、生活経験に乏しい様子が伺えた。

#### 4 研究仮説

人間の内面に潜在的にある本能・欲求・衝動といった「原興味」の視点から、生徒Aの諸感覚に働きかけ、様々な感覚運動あそびを生徒の実態に合わせて工夫をしながら自立活動等の授業に取り入れていけば、生徒Aの興味（＝「現興味」）の開発がなされ、自らかかわろうとする意思の表出等の自発的な行動が顕著に現れるだろう。

#### 5 研究の内容と方法

次の(1)～(4)の手順で行う。

- (1) 様々な視点から生徒Aの実態把握をし、今までどんな活動や事柄に興味があったのか（＝方法的興味）を探り、感覚運動あそびを実践していく上での配慮事項を確認する。
- (2) 生徒Aの個別の指導計画や年間指導計画を作成し、それらに関連させながら1年間という長期的な視野で計画的に授業を行う。
- (3) 「原興味」の視点を取り入れ、生徒の触覚・聴覚・バランス感覚・筋肉運動感覚・視覚に働きかけ、様々な感覚運動あそびを授業実践する。生徒Aにとって興味のあると思われる活動は継続して行い、生徒の実態に合わせて活動を工夫し、顔の表情、発声や注視、指差し等といった意思の表出の自発的な行動をたくさん引き出す。
- (4) 授業中の対象生徒の反応を個人カルテに記載したり、デジタルカメラで写真を記録し、それらの指導記録や個別の指導計画での評価、自立活動ミーティングにおける他教師からの情報交換から、活動の成果と課題を明らかにする。

#### 6 具体的な取組

##### (1) 生徒Aについての実態把握、情報収集

###### ① 個人カルテでの実態把握

本校には、生徒毎に個人カルテというファイルがあり、そのカルテの記述から生徒の障害の状況や今までの指導の経緯を把握することができる。前年度の引き継ぎ個人カルテから、生徒Aの今までにつくられてきた興味（＝方法的興味）の対象が、写真カード、車関係（タクシー・工事車両・ガソリンスタンド等）、水あそび（入浴）、音楽、食に関する活動（調理等）であることが把握できた。

###### ② ケースカンファレンスによる情報交換と配慮事項の確認

生徒Aは隣接する国立病院の入院生であることから、定期的に病院側（担当医、病棟看護師長、担当看護師、理学療法士、ケースワーカー）と学校側とで情報交換会（ケースカンファレンス）を行っている。そこでは主に、生徒の疾病の状態や身体の関節の可動範囲、禁止動作・姿勢、健康上の配慮事項等に関する情報を得た。特に、身体の動きに関しては首が座らないため急激な揺れに注意すること、座位の保持は可能であること、肘・膝・手指の関節の拘縮があり可動範囲が制限されていることが確認でき、様々な感覚運動あそびを実践していく上での参考にすることができた。

###### ③ 自立活動ミーティングを通じての情報交換

当校では、各学期の始めと終わりに個別の指導計画作成に関わる自立活動ミーティングを行っており、複数の教師が教科担任として生徒Aに関わっていることから、生徒Aの様子について情報交換を行った。

##### (2) 生徒Aの個別の指導計画の作成と当該学級の年間指導計画の作成

副任と相談しながら生徒Aの個別の指導計画を作成した。生徒Aの長期目標を「Ⅰ：楽しい経験をし、興味の対象を増やす」、「Ⅱ：自分の意思を何らかのサインで伝える」とし、学部内職員に周知し、計画的に指導していくことにした。また、自立活動の時間を主体とした年間指導計画を作成し、様々な感覚運動あそびを取り入れながら実践した。

##### (3) 様々な感覚運動あそびを取り入れた自立活動の時間の指導実践例と取り組みの結果（1年間）

把握した実態を踏まえ、以下のような実践を行って生徒Aの諸感覚に働きかけ、興味の開発と自発的な行動の促進を試みた。

〈実践例1〉写真カード等を用いての興味の開発（視覚に働きかけ探求的原興味・コミュニケーション的原興味へアプローチ）

様々な写真カードや広告、絵本を提示して視覚に訴える教材を提示し、生徒Aは何に興味を示し、自発的行動を出現させるか、その反応を探ってみることにした。

○取組の結果（資料3→）

生徒Aの反応の様子は資料3の通りである。特に、生徒Aは校外の場所を写した写真カードを見て、そこへ移動することに興味があり、写真の中から行きたい場所、あるいは馴染みのある場所に指差しをして「行くよ」「行くよ」と発声しながら、教師に視線を送る姿が多く見られた。こうした生徒Aの自発的な意思の表出を重要と捉え、毎日1時間はこの活動を行い、生徒Aの行きたい場所を教師が確認し、「〇〇に行きたいんだね。」と声をかけ、気持ちを受容的に受け止め、フィードバックすることによって、生徒Aの「自分の行きたいところに行く」という意思表示である指差しや視線での教師への訴え、「行くよ」という発声の自発的な行動をたくさん引き出すことができた。写真・絵本・広告を媒体として視覚に働きかけることで、好きな物を「注視する」という探求的現興味をつくり出し、自分のしてほしいことを「相手に要求する」というコミュニケーション的現興味をつくり出すことができた。

視覚への働きかけに用いた教材（興味のあるもののみ）	興味があると思われる具体的な対象とそれらに対して出現した自発的な行動
写真・絵本(食べ物)	「すし」「ラーメン」「カレーライス」「ハンバーガー」「ケーキ」の絵カードへの指差し、注視、教師へのアイコンタクトが見られた。食べ物の絵本のページをめくっていた。絵本を取ってほしいと「ん～」と発声要求あり。
写真・絵本(乗り物)	「パトカー」「消防車」「電車」の本を意欲的にページをめくったり、注視していた。時々、パトカーのサイレン音のまね発声をしていた。
写真(校舎内外の場所)	「病棟ベツト」「体育館」「中庭」の写真指差し、「行くよ」と発声。注視あり。写真を取ってほしいと「ん～」と言って要求を伝えていた。写真カードを封筒、箱、ファスナー袋の中や机の引き出しの中に入れてたところ、手指を使って取りだそうとしたり、「ん～ん～」と発声して要求したりする行動が見られた。
広告(ケーキ)	「イチゴケーキ」を注視、写真への指差しあり。広告をなめるしぐさが見られた。
広告(マクドナルド・ハンバーガー)	「マクドナルド」のCMの鼻歌あり。注視あり。広告を取ってほしいと「ん～」と発声での要求あり。指差しも見られた。
万華鏡	万華鏡を自らのぞきこむ姿が見られた。
車のおもちゃ	「パトカー」「マクドナルドカー」を注視し、自分で手にして机上で走らせていた。パトカーのサイレン音のまね発声があり、笑顔の表情を見せた。



写真カードを手に散歩をする生徒A

〈実践例2〉様々な素材を用いての感触あそびを通した興味の開発（触覚に働きかけ探求的原興味へアプローチ）

風船、スライム、足湯、小麦粘土、指絵の具等の様々な素材を生徒Aに提示して、生徒Aの触覚に働きかけ、「触りたい」という探求的現興味を揺さぶることで、どのような素材や活動に興味を示し、どのような自発的行動を出現させるのかを探ってみた。

○取組の結果（資料4→）

特に、スライムや小麦粘土については、そのねばねばした感触に生徒Aは初めの頃なかなか手を出さなかった。様々な色で着色したり、水の配合を変えたりしながら活動を飽きさせないように工夫した。経験回数を重ねさせていくと、生徒Aの恐怖感は次第に薄れていった。2学期後半には、生徒Aはスラ

視覚への働きかけに用いた教材（興味のあるもののみ）	興味開発のための指導の工夫と出現した自発的な行動
紙風船	A男の前で膨らませる。指を動かし紙の音をたてて紙風船の感触を味わっていた。
ゴム風船	ゴムの膨らむ様子を注視。指を何度も動かし、ゴム風船の感触を味わっていた。
エアーパーキン	教師がエアーパーキンをつぶして音を出すと、目をぱちぱちさせてびっくりした表情になった。力が入らずつぶせないが、指を動かしてつぶそうとする動作あり。
油粘土	粘土を注視し、指で粘土を叩く、つねるの動作あり。時々笑顔も見られた。
紙粘土	粘土を注視し、指で粘土を叩く、つねるの動作あり。教師と一緒に紙粘土で「ハンバーガー」を作ると、「マクドナルド」のCMの鼻歌が聞かれた。
小麦粉粘土	洗面器の中に食紅「赤」「緑」「黄」で染色した小麦粉粘土を入れ、水の配合を変えながら、感触を味わわせる。最初は触るのにとまどいが見られたが、回数をこなしていく中で、よく見て手を出し、感触を楽しむことが多くなった。
足湯	様々な入浴剤を入れ、ぬるま湯を入れたたらいに足を入れさせた。ボールを浮かべてあげた。入浴は好きなので、笑顔になり「いい湯だな～」の鼻歌が聞かれた。
スライム	様々な色で着色し、水の配合を工夫。最初はその感触にとまどいが見られたが回数をこなしていく中でよく手を出し、感触を楽しむことが多くなった。
指絵の具(ぬたくり)	指絵の具を筆で自由に塗らせたり、指でぬたくりを行い、指を動かして絵の具のべとべとした感触を味わっていた。

イムや小麦粉の入った洗面器を目の前に出されると、自ら手を入れて指を懸命に動かし、笑顔でそれらの感触を楽しむ様子が多く見られるようになった。生徒Aの触覚に働きかけることで、当初興味のなかった対象物に対して「意欲的に触る」という探求的現興味をつくり出すことができた。

〈実践例3〉大型遊具等の揺れあそびを通じた興味の開発（バランス感覚・筋肉運動感覚に働きかけ表現的原興味へアプローチ）

筋ジストロフィーという病状から、手足の関節の可動範囲が制限され、しかも首の座りが悪いこともあり、生徒Aは今までにブランコの揺れ等の粗大運動の経験が極端に少ないと考え、様々な大型遊具での揺れあそびを行って、生徒Aの興味の開発が図られないかどうか実践してみた。生徒Aのバランス感覚や筋肉運動感覚に働きかけ、どの活動に対して反応を示し興味を抱くのかを探ってみた。

○取組の結果（資料5→）

他の生徒も一緒に活動に参加し、集団の中で大型遊具による揺れあそびが楽しめるよう配慮し、複数教師で指導にあたった。ハンモックブランコやソリブランコの様に、宙づりになって活動の際に危険が伴うものについては、マットを敷く、安全ベルトで固定する等、安全面での配慮を十分に行った。実施当初は、慣れない前後・上下動の粗大な揺れや回転運動に対して恐怖感があり、生徒Aの顔にも緊張した様子が見られた。しかし、繰り返し活動を行っていくと徐々に緊張感がとれ、1学期後半には、揺れに対して慣れ笑顔が多く見られるようになった。そして、特にハンモックブランコをしている時に笑顔を見せたり、鼻歌を歌ったりする等の自発的な行動が見られるようになった。生徒Aは、活動の度にプレールームに置かれている様々な大型遊具の中でも、ハンモックブランコへ視線を送ることが多かったので、生徒Aはハンモックブランコに興味があると考え、ハンモックに乗せて揺らす際には、前回の楽しかった様子を生徒Aに思い出させるためにも教師も一緒に鼻歌を歌い、さらにラジカセでその歌の原曲をかけながら揺らしてみたと、生徒Aは追従するかのよう鼻歌を歌う行動を見せた。生徒Aは、ハンモックブランコという普段あまり経験することのなかった粗大運動を経験することで、ハンモックブランコに対して興味をもつことができ、さらに、ハンモックブランコに乗っている時の心地よさ、楽しさを鼻歌で表現するという表現的現興味をつくり出すことができたといえる。

（4）各評価から見た生徒の変容の様子（成果）

① 自立活動ミーティングでの情報交換・個別の指導計画の長期目標の評価に見られる生徒Aの変容の様子

特に、一年後の個別の指導計画における長期目標の評価記述からは、長期目標Ⅰに対して「大型遊具を使った揺れあそびを好み、活動を楽しんだ。様々な素材を用いた感覚あそびでは、意欲的に素材に触れて感触を味わい、興味の対象を増やすことができた。」、長期目標Ⅱに対しては、「興味関心のあるものに対して、自ら指差しや発声、視線で伝えることができた。」との評価が出された。また、自立活動ミーティングにおける他教師からの情報では、「生徒Aに笑顔が増えた。」「指差し、発声による意思表示がたくさん増えた。」との意見が交わされた。また、「音色がきれいで穏やかな曲を好み、目を閉じて聴き入ったり、体を揺らしたりする行動が見られた。」等、聴覚の面からも生徒Aの興味の開発がなされた様子も伺い知ることができた。



小麦粉粘土の感触を楽しむ生徒A

バランス感覚・筋肉運動感覚への働きかけに用いた教材（興味のあったもののみ）	興味開発のための指導の工夫と出現した自発的な行動
毛布ブランコ	教師が「ゆらゆらゆれて～」の歌を歌いながら、左右に振る。最初は目をぱちぱちさせてびっくりした表情であったが、次第に笑顔が見られた。
エアートランポリン	姿勢は仰向けにさせ、ゆっくり上下に揺らしたところ、笑顔が見られた。
ソリブランコ	ソリに仰向けに寝かせて乗せ、ソリを宙釣りにし安全対策として固定バンドをつけ、前後左右、8の字に揺らした。時々SMAPの「世界に一つだけの花」の鼻歌が聞かれた。途中発声あり。
ハンモックブランコ	最初は怖がる表情もあったが、回数をこなすうちに、笑顔になりSMAPの「世界に一つだけの花」の鼻歌が聞かれた。CDで曲を流したり、教師も一緒に歌ってあげたところ追従する行動あり。ハンモックブランコに乗りたいと指差しや視線を送る姿も見られるようになった。
フィズィオボール	指を腕で固定し、教師が抱きかかえて一緒にフィズィオボールに乗り、上下動のゆっくりとした揺れを楽しみ、目を瞬きして笑顔が見られた。
すべり台	斜度30度のすべり台から、毛布に横にさせて、毛布を引いて滑らせた。最初は、目をぱちぱちさせてびっくりした表情であったが、次第に笑顔が見られた。



ハンモックブランコの揺れを楽しむ生徒A

## ② 指導記録に見る生徒Aの変容の様子（資料6→）

右の生徒Aの指導記録（個人カルテ）の一部から、1年間授業実践をしてきて、3学期になるにつれ、様々な活動に対して生徒Aが笑顔をたくさん見せ、自らかかわろうとする意思が現れて、興味の幅が広がっている様子を把握することができた。

### 7 考察

以上3つの実践例から、重度・重複障害児がもつ本能・潜在的興味（＝「原興味」）は、感覚運動あそびによって彼らの諸感覚が継続的に刺激を受けることで、彼らの中にある「原興味」が覚醒され、それらが「つくられていく興味」（＝「現興味」）へと変化し、その結果として、重度・重複障害児の興味が開発されるということが立証できた。

また、今回様々な感覚運動あそびを積極的に授業に取り入れ、生徒Aの諸感覚に働きかけたことで、生徒Aの発達的側面も促すことができた。それは、授業中教師に笑顔を見せることや教師と視線を合わせるが多くなったり、意思表示を多く行ったりする等、生徒Aの表出行動の増加が見られたということである。こうした生徒Aの姿から、感覚運動あそびを用いた指導は重度・重複障害児への指導にとっても有効であるということが実感できた。

今回、大沼の主張する「原興味」の視点を取り入れた感覚運動あそびを実践し、重度・重複障害児の興味の開発の経過を観察してみたが、こうした「原興味」の視点が、本来の人間の本能と直結していることから、対象がどんなに障害の重い重度・重複障害児であっても、障害の程度に関係なく、後の興味が開発されたかどうかという点で、教師側の見取りがとても行きやすいことを実践を通して改めて感じた。また、重度・重複障害児の興味の開発を行っていく際には、教師は、様々な感覚刺激に対して重度・重複障害児が示すサインをしっかりと読み取り、受容的に受け止め、必要に応じて教師が子どもに声をかけてフィードバックをさせながら、活動を継続して行っていくことが大切である。そうすれば、子どもは教師に対して心を開き、活動に対して安心感をもち、諸感覚からの情報を前よりもうまく処理できるようになる。そして、その結果、指差しや発声、手を出す等興味の対象に対して自らかかわろうとする自発的な行動をたくさん出現させてくれるということが本実践から明らかとなった。

### 8 今後の課題

前述のように実践していく中で、重度・重複障害児は病弱であり、医療的なケアを常に必要としていることから、その時々の変容の変化によっては、教師の期待に沿うような反応が得られないこともあることも筆者自身痛感した。

また、興味の対象には生徒独自のこだわりがあったり、場合によっては一つの興味対象に固執してしまったりすることもあり、興味を開発していくためには、今回のように1年間という見取りでは期間が少々短く、やはり3年ぐらいの長期的な視野で見ていく必要性を感じた。そうすれば、もっと生徒の色々な側面を発見することができ、生徒の興味をたくさん開発することができ、もっとかかわりたいという自発的な行動をさらに促すことができたのではないかと思う。

### 引用文献・参考文献

- 文部省「重度・重複障害児に対する学校教育の在り方について（特殊教育の改善に関する調査研究会報告）」1975年  
 西川公司「重複障害児の指導ハンドブック」全国心身障害児福祉財団 2000年 p3, p4  
 大沼直樹「重度・重複障害児の興味の開発法～四つの感覚と四つの興味」明治図書2002年 p10, p14, p15, p130  
 上野一彦, 他「特別支援教育基本用語100」明治図書 2005年 p28  
 坂本龍生, 花熊 暁「新感覚統合法の理論と実践」学研 1997年 p13, p18  
 坂本龍生「絵でわかる障害児を育てる感覚統合法」日本文化科学社 1991年 p11～p16

日付	記録No.8
1/16 (水)	5限自立活動では、好きな乗り物の本を目の前にして自らページを開いて読んでいた。
1/21 (月)	1限生徒集会でスクリーンの映像を注視していた、3限体育では、車椅子ホッケーゲームを廊下で行い、スティック棒を動かして笑顔が見られた。
1/22 (火)	朝の会では、ドレミの歌に合わせてタンバリンを叩く姿が見られた。 2限作業活動では、小麦粉粘土で手指を動かして笑顔で感触を楽しんでいた。
1/23 (水)	3限ベットサイド学習をする。乗り物の本をよく見ていた。時折笑顔が見られた。5限もベットサイド学習を行ったが、すでに車椅子に乗っており、食堂の方で乗り物の本を意欲的に読む。
1/24 (木)	6限時、いつもの写真カードにこだわり、それを取ってという意味の「痛い」を言っていた。写真カードを手にする時、「痛い」と言わなかった。
1/25 (月)	2限合同音楽会では、様々な打楽器を意欲的に鳴らしていた。パネルシアター「ねずみの嫁入り」に興味をもち見入っていた。4限個々の活動では、フィジオボールに乗って揺れを楽しんだ。5限生活の時間では雪遊びを行い、洗面器の中で雪の感触を味わっていた。